

2 Lua \LaTeX での簡単な実例

次の実例のとおり、kanbun パッケージを使えばただの軽量なアノテーションで漢文訓読を組版できる。手動でマクロを入力するではなく、プログラムが自動的にアノテーションのあるプレーンテキストを Lua で処理して \LaTeX マクロに変更する。

```
\documentclass{ltjrtarticle}
\usepackage[kumi=aki, tateaki=1]{kanbun}
\begin{document}
\Kanbun
月落子烏啼キテ霜満ツ[レ]天ニ，
江楓漁火対ス[ニ]愁眠ニ[一]。
姑(こ)蘇(そ)城外ノ寒山寺，
夜半ノ鐘声到ル[ニ]客船ニ[一]。
\EndKanbun
\printkanbun
\end{document}
```

夜 姑^こ 江 月
半^ノ 蘇^そ 楓 落^チ
鐘 城 漁 烏
聲 外^ノ 火 啼^{キテ}
到^ル 寒 對^ス 霜
客 山 愁 満^ッ
船^ニ 寺 眠^ニ 天^ニ

この機能を使う場合、必ず Lua \LaTeX で実行してください。

3 使用方法

3.1 パッケージのオプション

パッケージの読み込みは次のようにしてよい:

```
\usepackage[〈 kanbun のオプション 〉]{kanbun}
```

以下のオプションでさまざまな漢文訓読におけるパラメーターを設定できる。

`scale`=〈 比 〉

ルビ文字のサイズに対する漢字のサイズの割合を設定する。初期値：2。

`fontcmd`=〈 書体のコマンド 〉

漢字の書体のコマンドを設定する。luatexja-fontspec パッケージが読み込まれてある場合、`\addfontfeatures{RawFeature={+trad}}` に初期化されて、旧字体のグリフに変更する。

`rubyfontcmd`=〈 書体のコマンド 〉

ルビ文字の書体のコマンドを設定する。luatexja-fontspec パッケージが読み込まれてある場合、`\addfontfeatures{RawFeature={+ruby}}` に初期化されて、ルビグリフに変更する。

`unit`=〈 長さ 〉

(正方形だと仮定して)漢字の寸法を設定する。初期値：`\kanbun_init_zw` (1em に等しい長さ)。

`yokoaki`=〈 比 〉

ルビ文字のサイズに対するインテルの幅の割合を設定する。初期値：2。

`tateaki`=〈 比 〉

ルビ文字のサイズに対する漢字間のアキ量の割合を設定する。初期値：2。

`okuriintrusion`=〈 比 〉

ルビ文字のサイズに対する送仮名^{イントルージョン}進入量(送仮名を上^{イントルージョン}に突かせて漢字に掛ける長さ)の割合を設定する。初期値：1。

`kumi`=aki, beta

アキ組を使うかベタ組を使うかを設定する。`kumi=` を書かず、単に `aki` か `beta` かと書いてもよい。

オプションを初期化する後でも、`\setkanbun` を使ってオプションを変更できる。例えば、ベタ組に再設定するには下記のコードを使う。

```
\setkanbun{beta}
```

3.2 Lua \LaTeX を使わない場合の基本使用(お薦めではない)

漢文アノテーションの機能を使わない場合、任意の CJK 支援のあるエンジンで漢文を組版できる。例えば Xe \LaTeX を xeCJK パッケージと一緒に使うか、up \LaTeX を utarticle クラス或いは他の適宜なクラスと一緒に使うか、どちらもよい。

```
\kanjiunit{ \furiokuri{< 右の振仮名 >}{< 右の送仮名 > }  
  {< 左(上)の句読点(“”など)>}  
  {< 漢字 >}  
  {< 他の句読点 >}  
  {< 返点 >}  
  { \furiokuri{< 左の振仮名 >}{< 左の送仮名 > } }
```

`\kanbunfont`

漢字のサイズを設定する。unit オプションと文書のデフォルト文字サイズが違う時に使う。

複数個の漢字に仮名を振れば、`\furiokuri` の代わりに `\multifuriokuri` を使う。

```
\multifuriokuri[< ルビ文字を上げる長さ >]{< 振仮名 >}{< 送仮名 >}
```

例えば、`tateaki` が 1 に設定されている場合、下記のコードを使えば

```
% example text from https://phesoca.com/kanbun-html/  
\kanbunfont  
\kanjiunit{}{}{子}{}{}  
\kanjiunit{\furiokuri}{ク}{曰}{, }{}  
\kanjiunit{\furiokuri}{ゾ}{盍}{三}{\furiokuri}{ル}  
\kanjiunit{}{}{各}{々}{}  
\kanjiunit{\furiokuri}{ハ}{言}{二}{}  
\kanjiunit{\furiokuri}{ノ}{爾}{}{}  
\kanjiunit{\furiokuri}{ヲ}{志}{。}{一}  
\par
```

こう出力する:

言_ハ 子
爾_ノ 曰_ク
志_ヲ 盍_ゾ
各_々

3.3 Lua \TeX での使用

漢文アノテーションでは下記の括弧を以って漢文訓読における各要素を示す(UntPhesocaの漢文HTMLを参照されたい)。

- (): 振仮名
- { }: 送仮名(この括弧を省略してもよい)
- ‹ ›: 再読文字の振仮名
- ‹›: 再読文字の送仮名
- []: 返点
- ‘ ’: グループルビのベース。中に^{たててん}堅点を入れてもよい
- アノテーション無し: 漢字と句読点

— (U+2015) か — (U+2014) か | (U+3190) かで堅点を入力できる。

`\Kanbun`

`\EndKanbun`

アノテーションのある漢文を `\Kanbun` と `\EndKanbun` の間に書き込む。処理されて、保存されておいて、後で使用可能となる。

`\printkanbun`

最近保存された漢文訓読を使用するには、`\printkanbun` を使う。自動的に `\kanbunfont` と `\par` を挿入して寸法やインテルを設定し、段落を作成する。

`\printkanbuncode`

処理の結果を一部変更する、もしくは結果を Lua \TeX でないエンジンで使用するには、結果のマクロを `\printkanbuncode` で入手して(端末に出力)、そこから作業を続けることが可能。

`\printkanbunnopar`

`\printkanbun` に対応する段落無しのバージョン。 `\kanbunfont` を使用せず、 `\par` の代わりに使用する。

`\printkanbunnoparcode`

`\printkanbuncode` に対応する段落無しバージョン。

次の実例のとおり、後で使えるように `\printkanbun` をあるマクロに保存し、新しい漢文段落を書き込み始められる。

```
% example text from https://phesoca.com/kanbun-html/  
\documentclass{ltjtarticle}  
\usepackage[kumi=beta]{kanbun}  
  
\Kanbun  
此レ乃チ信(しん)之‘所一[三]以’(ゆゑん)為ル[二]陛下ノ禽(とりこ)ト[一]也。  
\EndKanbun  
\let\信\printkanbun  
  
\Kanbun  
孤之有ルハ[二]孔明[一]，猶ホ<ごと>«キ»[二]魚之有ルガ[一レ]水也。  
\EndKanbun  
\let\孔明\printkanbun  
  
\begin{document}  
\孔明\par\bfseries\信  
\end{document}
```

孤之有ルハ孔明、猶ホ魚之有ルガ水也。
此レ乃チ信之、所一以爲陛下ノ禽一也。